



草津宿本陣

大名・貴人の宿一本陣—

江戸時代には五街道（東海道、中山道、甲州街道、日光街道、奥州街道）をはじめ、全国的に街道が整備され、公用人馬の継立のため宿が設けられました。全国各地の大名は、寛永12年(1635)から参勤交代といって、江戸と領許の在住を1年毎に交代しなければならなくなり、そのつど大名行列をして江戸との街道を往復しました。そのため宿には大名の泊る宿舎が設けられました。これを本陣といいます。

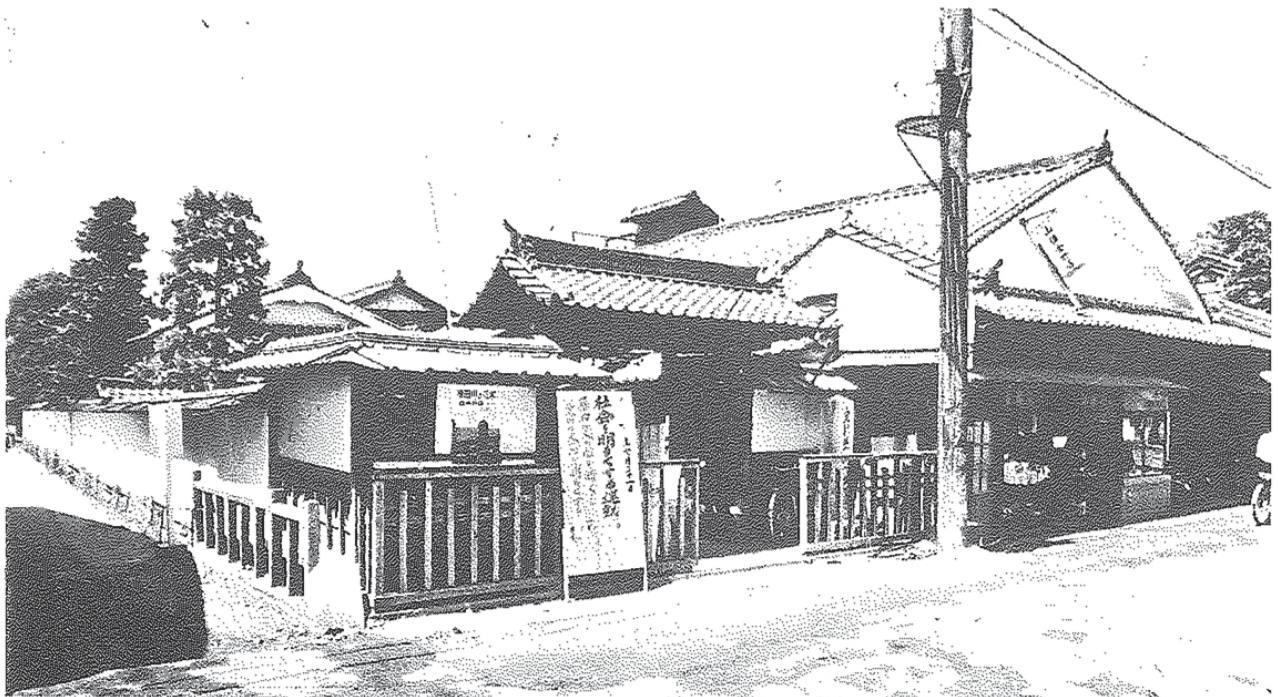
本陣の名前のはじまりは、貞治2年(1363)室町幕府2代将軍足利義詮が上洛のとき、その宿舎に本陣と称して宿札をあげさせたのよるといわれますが、もともとの意味は戦のとき、総大将のいた軍営をさします。本陣には大名のほか、勅使、宮家、門跡、公家、幕

府の役人なども泊りました。交通のさかんな街道の宿（宿場町）では、本陣が2つとなり、さらに脇本陣1～2が設けられました。

草津の本陣・脇本陣

草津は東海道と中山道の分岐点で、重要な宿だったため、本陣2、脇本陣4がありました。本陣は田中九蔵、田中七左衛門、脇本陣は藤屋、大黒屋、柏屋、仙台屋（安政5年、御本陣並旅籠屋仕訳書上）で、このうち九蔵本陣が筆頭本陣であり、七左衛門本陣は材木商を兼ねていたので木屋本陣といわれました。両本陣の差はわずかではあるが規模にも示され、敷地坪数、表間口はそれぞれ九蔵本陣が1315坪、19間、七左衛門本陣が1305坪、14間半でした。（1坪=3.3㎡、1間=1.8m）

一般に本陣の敷地は約350坪、脇本陣は150



草津・木屋本陣

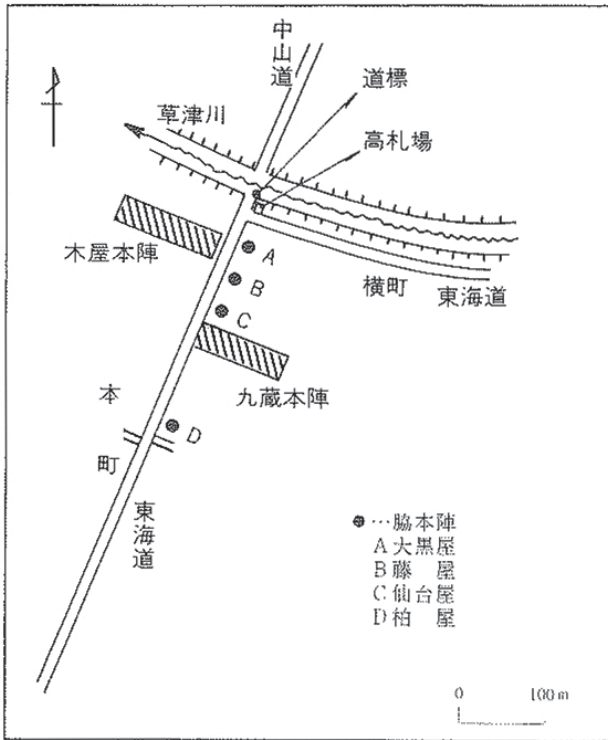


図1 本陣の位置

坪前後といわれますから、草津の両本陣は小田原、浜松などとともに最大のクラスに入ります。しかし、たとえば中山道蔵宿の本陣が敷地353坪で畳数220畳半ですから、九蔵本陣264畳半、七左衛門本陣268畳半と比べると畳数の差は、敷地の差ほどは大きくなかったことがわかります。

本陣や脇本陣は多くは宿の中央部にありました。草津の場合は図1のとおりです。このことは石部、水口、土山についても同様です。九蔵本陣は明治以後絶えてしまい、今日ではそのあとに商店がたち並んでいます。七左衛門本陣はいまでも昔の姿を残して史跡に指定され、貴重な文化財となっています。

一国の史跡—田中七左衛門本陣(木屋本陣)

田中七左衛門家の由緒書によると、田中氏は群馬県出身で、2代目与市が慶長2年(1597)草津に移り住み、3代目のとき、参勤交代制の開始にともなって寛永12年本陣職をつとめることになったといえます。享保3年(1718)4月建物が火災で焼失したので、膳所藩主の本多氏から瓦が浜御殿(大津市膳所瓦が浜にあった藩主の別邸)を拝領し、移築しました。

これが現存する建物です。

本陣は大名はじめ高貴の人びとが泊るところだけあって、脇本陣や庶民の泊る旅籠屋にない格式をそなえていました。建物は書院造で、表門、御除門(避難口)、敷台のある玄関、上段の間などが本陣独特のもので、

七左衛門本陣の平面図は図2のとおりで、表通りから向かって右側に、台所口と当主の住居があり、左側に表門、中央に板間(現在は金物店に貸している、荷物置場に使った)があります。表門を入ると砂利をしきつめた白砂をへて玄関につきます。玄関は16畳の板間(敷台という)で、大名の乗った駕籠を横付けできる広さを持ち、正面には大名行列に使った長柄の槍をかける槍床があります。

白砂は出発のとき、供ぞろえをするのに便利で、左側に用水と番所がありました。

玄関の右に9畳、8畳、9畳と細長い畳廊下があって奥の方へのび、その両側に部屋がつづいています。奥は一段高くなり、左側に4畳半の茶室、その奥にさらに一段高くなった「上段の間」があります。ここが大名などの泊ったところで、「御居間」とよばれ、8畳の間の中央には白の大紋でふちどられた2枚の畳(二畳台という)が置かれています。

御居間の向かって右は「入側」または「鞆



表門と白砂

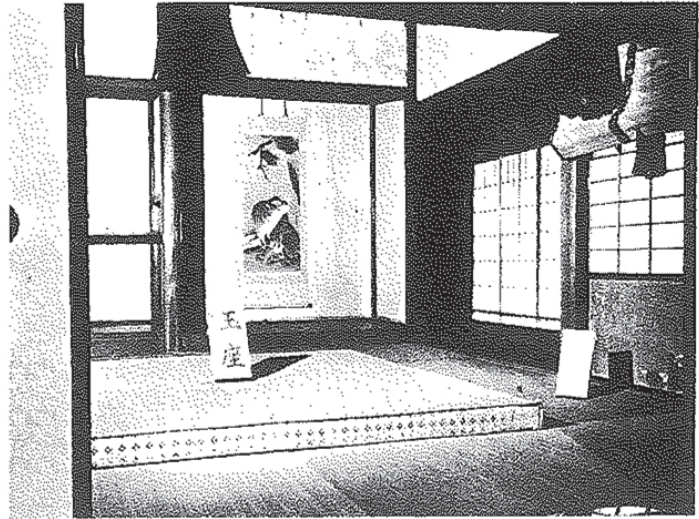
の「間」という5畳の細長い部屋で、警固の武士がいたところです。

畳廊下の奥の右側、すなわち御居間の向かい側には6畳と12畳の間があり、重臣たちが泊りました。ここを「向上段」といいます。また、畳廊下をへだてて玄関の反対側には、料理を配膳した13畳の「御膳所」があります。

以上が本陣の主要部ですが、その奥には大きな物入（倉庫）がならび、裏門を出ると272坪の空地と手伝いの者が住んでいた「抱長屋」がありました。倉庫は当主が材木商を兼ねていたので、材木をいれるのに使用したといわれます。

本陣の一つの特色は敵の攻撃に対する防禦のかまえです。図でみられるように敷地の南側は幅2.1メートルの川が堀の役目をし、その内側に白壁の高塀があります。西および北側は幅1.8メートルの外堀と幅1.5メートルの内堀という二重の堀を設け、その間を竹藪として敵の侵入を防ぎ、さらに敷地の中では物入が防壁の役目を果たすようにしています。また、非常のとき、たやすく避難できるように御除道や御除門を準備したのです。外へ出て、もし北が危ないときは、裏道を550メートル南へ行って立木神社の中にある神宮寺（今は横町に移転）に、反対に南が危ないときには、北へ約1,100メートル行って渋川村の光明寺にそれぞれ逃げよう手配されていました。

明治3年(1870)閏10月、本陣は廃止されましたが、その後、建物は郡役所（明治12~40年）、公民館（昭和22~45年）に利用されました。昭和24年7月には国の史跡草津宿本陣として指定され、今日に至っております。郡役所時代に馬屋が会議所（現在は展示室に利



上段の間

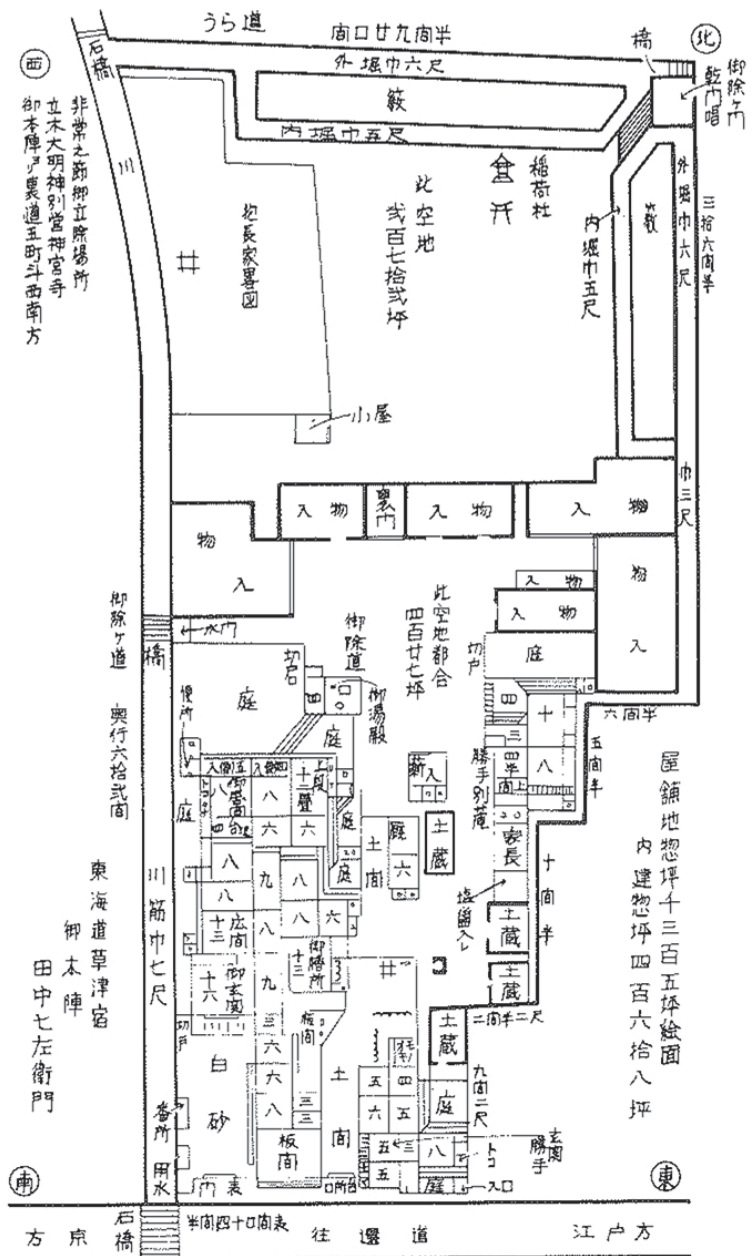


図2

木屋本陣の平面図

用)に改築されたり、湯殿や抱長屋が借家になるなどの変化はありましたが、本陣遺構の姿は基本的にはほとんど図2と変わっておりません。それだけに全国的にみてもきわめて大切なものです。このように残ったのは、田中家代々の当主が保存に意を払われたたまものです。

貴重な本陣史料

七左衛門本陣には、建物のほか、多くの交通関係資料や古文書も残されています。たとえば、大名などが休泊したとき、表門や宿の入り口に掲げた関札、草津川の渡しに用いた籠台、当時の旅行用具、明治天皇行幸関係の品物などで、これらは一部が本陣内に展示されています。

古文書では、元禄5年(1692)から明治5年(1872)までの大福帳181冊をはじめ、藩主の御黒印(屋敷の税金免除状)、御得意様の書貫帳、宿割帳、御休泊御先触留、旅籠屋取締受印帳、俵出帳、高辻帳、願書類、宗門改帳(幕末期の12ヵ年分)など数多くのものがあります。これらの史料は本陣関係以外に町関係の

ものも少なくありません。これは代々の当主が問屋役や庄屋役を兼ねたことがあるからです。

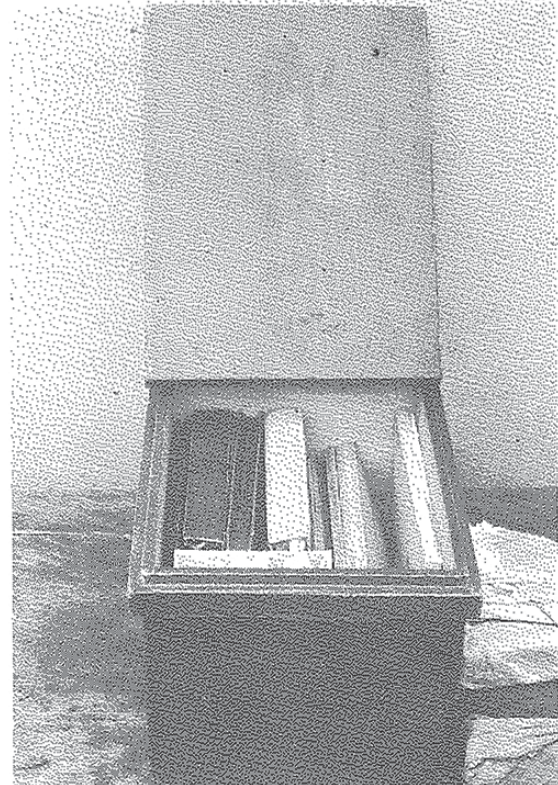
なかでも181年間の大福帳は、毎日の休泊者とその人数、宿賃と目録(茶代)を詳しくしるしてあり、東海道、中山道筋での大名、公卿の通行を知るうえで貴重なものです。これらの大福帳はまだ十分には分析されていませんが、先代の田中森之助氏が元禄年間(1688-1704)、吉良上野介と浅野内匠頭が相前後して宿泊したこと、天保10年(1839)日向佐土原藩主島津忠徹が本陣内で病死したことなどを調べています。また文政9年(1826)にはオランダ商館の一行としてドイツの医師シーボルトが泊り、文久元年(1861)には皇女和宮が下向のとき昼食をとられたなども知られています。さらに明治天皇は前後4回休泊されました。

このように古文書類は宿泊のようすや宿のありさまをよく伝えてくれます。それだけに本陣遺構とともにたいせつに保存する必要があります。

写真は草津市教育委員会および田中家のものをお借りしました。(小林博氏提供)



関 札



古文書の一部